

経済教育ワークショップ「札幌」

日時：2011年2月20日（日）15:00～17:00

場所：キャリアバンクセミナールーム（札幌駅横 Sapporo55 ビル5階）

北海道での活動は、一昨年の夏のイベント協力（北海道高等学校政治経済研究会第34回研究大会においてモデル授業等を行った）、昨夏の「先生のための『夏休み経済教室』：札幌」について3回目である。当日は春を思わせるような暖かい日差しのもと、道内の中学・高校・大学教員と、企業担当者らが集い、篠原総一経済教育ネットワーク理事長からの挨拶・講演のあと、参加者全員で今後の活動に関する協議を行った。

【プログラム】

（司会：札幌旭丘高等学校 川瀬雅之先生）

15:00～16:00 提案：「経済」の教え方「仕組み学習のすすめ」同志社大学経済学部篠原総一

16:00～17:00 協議：北海道における経済教育の展開 参加者全員

17:30～21:00 懇親会

【講演要旨・活動概要】

はじめに、篠原総一先生から『『経済』の教え方『仕組み学習のすすめ』』と題する講演が行われた。

冒頭で先生は「社会のこと、とりわけ経済のことをきちっと学ぶことのできる最後のチャンスは高等学校の政治・経済、もしくは現代社会という教科書である。大学で経済学を専攻するものはわずかであり、その上、大学ではもっと専門的な分野に入ってしまう。したがって、政治・経済や現代社会は受験の中核科目ではないという次元の話ではなく、子どもたちが社会に出たときに、社会のことについて自分で考えることができるように成長させてあげることが大切である」という点を強調された。

しかし、教科書の記述は現象や理論の一部分を断片的に切り取ったようなものが多く、その前提条件や理論そのものに触れていないことが多いので、それを教える先生方でも勘違いをされたり、本質をつかまないうまま授業されていることが多いのではないかと指摘がなされた。例えば、「リカードの比較生産費は、高等学校のどの教科書にも載っている。これで分業の利益を教えるということになっているが、比較優位を教えようと思えば、先に絶対優位がわかっているなければならないのに、教科書には書いていない。また、生産要素は国の間を動かないということが前提となっている。しかし、ソニーやトヨタの例をみればわかるように、今や海外に生産拠点を持つ企業が多く、生産要素は国際間を動いている」と具体例をあげて説明された。

また、現代の社会では、「企業が『分業』の仕組みの核」であり、「市場が『交換』の中心」であることを話されたあと、分業と交換のルール作りや監視・監督により、これらの仕組みを支えるのが政府の役割であるということのパワーポイントで図を示されながら話された。

次いで、「すし食いねえ」や「住宅メーカー職場シミュレーション」など、経済教育ネットワークおよびその会員が開発した教材の例が示され、このようにシミュレーション教材・ゲーム教材を通じて仕組みを理解させることが経済分野を身近に感じさせるコツであるという点を強調された。最後に、経済教育ネットワークの活動内容にも触れられて、講演と提案を締めくくられた。

後半は、札幌市内外から集まられた先生方と企業担当者が、自己紹介を兼ねて、各々の取り組みや

問題意識、現状、ネットワークへの期待などを話された。

その後、川瀬先生から、今年も夏休みに2日間の日程で「先生のための『夏休み経済教室』：札幌第2弾」もしくは「経済教育ワークショップ in 札幌」の試案が示され、それをもとに今後の北海道での経済教育の進め方について議論が交わされた。

当初は10名程度の参加を見込んでいたということであったが、経済教育に関心を持っておられる先生方が30名近く集まった。また、ほぼ全員の方が懇親会にも参加され、夜遅くまで情報交換・意見交換を行われていたのが印象的であった。

(文責：藤井宏樹)